

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

わたしは思い出す。しばらく前に訪れた高齢者用のグループホームのことを。^(注1)

住むひとのいなくなった木造の民家をほとんど改修もせずに使う^(注2)デイ・サーヴィスの施設だった。もちろん「バリアフリー」からはほど遠い。玄関の前には石段があり、玄関の戸を引くと、玄関間がある。靴を脱いで、よいしょと家になると、こんどは襖^{ふすま}。それを開けてみなが集^くまっている居間に入る。軽い「認知症」を患っているその女性は、お菓子を前におしゃべりに興じている老人たちの輪にすぐには入れず、杳然^{ぼうぜん}と立ちつくす。が、なんとなくいたたまれず腰を折ってしゃがみかける。とつさに「どうぞ^(注3)と、いざりながら、じぶんが使っていた座布団を差しだす手が伸びる。「おかまいなく」と座布団を押し戻し、「何言^(注4)うておすな。遠慮せんといっしょにお座りやす」とふたたび座布団が押し戻される……。

和室の居間で立ったままでいることは「不自然」である。「不自然」であるのは、いうまでもなく、人体にとってではない。居間という空間においてである。居間という空間がもとめる「キョソ」の「風」に、立ったままでいることは合わない。高みから他のひとたちを見下ろすことは「風」に反する。だから、いたたまれなくなつて、腰を下ろす。これはからだで憶^{おぼ}えているふるまいである。からだはひとりでにそんなふう^(注3)に動いてしまう。

A からだが家のなか^(注3)にある、というのはそういうことだ。からだの動きが、空間との関係で、ということは同じくそこにいる他のひとびととの関係で、ある形に整えられているということだ。

「バリアフリー」に作られた空間ではそうはいかない。人体の運動に合わせたこの抽象的な空間では、からだは空間の内部にありながらその空間の「外」にある。からだはその空間にまだ住み込んでいない。そしてそこになじみ、そこに住みつくというのは、これまでからだ^(注3)が憶えてきたキョソを忘れ去るということだ。だだっぴろい空間にあって立ちつくしても「不自然」でないような感覚がからだを侵蝕^{しんしょく}してゆくということだ。単独の人体がただ物理的に空間の内部にあるということがまるで自明であるかのように。こうして、さまざまなるまいをまとめあげた「暮らし」というものが、人体から脱落してゆく。

心ある介護スタッフは、入所者がこれまでの「暮らし」のなかで使いなれた茶碗や箸を施設にもつてくるよう「指導」する。洗う側からすれば、割れやすい陶器製の茶碗より施設が供するプラスチックのコップのほうがいいに決まっているが、それでも使いなれた茶碗を奨める。割れやすいからいいに持たないに持つ、つまり、身体ふるまいに気をやる機会を増すことで「痴呆」の進行を抑えるということももちろんある。が、それ以上に、身体を孤立させないという配慮がそこにはある。

停電のときでも身の回りのほとんどの物に手を届けることができるように、からだは物に身を寄せかけている。からだは物の場所にまでいつも出かけていつている。物との関係が切断されれば、身は宙に浮いてしまう。新しい空間で高齢者が転びやすいのは、比喩ではなく、まさに身が宙に浮いてしまうからである。まわりの空間への手がかりが奪われているからである。「バリアフリー」で楽たとおもうのは、あくまで介護する側の視点である。まわりの空間への手がかりがあつて、他の身体——それは、たえず動く不安定なものだ——との丁々発止のやりとりもはじめて可能になる。とすれば、人体の運動に対応づけられた空間では、他のひととの関係もぎくしゃくしてくることになる。あるいは、物とのより滑らかな関係に意を配るがために、他者に関心を寄せる余裕もなくなってくる。そう、たがいに「見られ、聴かれる」という関係がこれまで以上に成り立ちにくくなる。空間が、いつてみれば、「中身」を失う……。

X「中身」?

この言葉をいきいきと用いた建築論がある。青木 淳^(注6)の『原っぱと遊園地』(王国社、二〇〇四年)だ。青木によれば、「遊園地」が「あらかじめそこで行われることがわかっている建築」だとすれば、「原っぱ」とは、そこでおこなわれることが空間の「中身」を創つてゆく場所のことだ。原っぱでは、子どもたちはとにもかくにもそこへ行つて、それから何をして遊ぶか決める。そこでは、たまたま居合わせた子どもたちの行為の糸がたがいに絡まりあい、縫りあわされるなかで、空間の「中身」が形をもちはじめ。その絡まりや縫りあわせをデザインするのが、巧い遊び手のわざだということであろう。

青木はこの「原っぱ」と「遊園地」を、二つの対立する建築理念の比喩として用いている。そして前者の建築理念、つまりは、特定の行為のための空間を作るのではなく、行為と行為をつなぐものそれ自体をデザインするような建築を志す。「B 空間がそこ

で行われるだろうことに對して先回りしてしまつてはいけない」というわけだ。

では、造作はすくないほうがいいのか。^(注7) ホワイトキューブのようなまったく無規定のただのハコが理想的だということになるのだろうか。ちがう、と青木はいう。

まったくの無個性の抽象空間のなかで、理論的にはそこでなんでもできるということではない。たとえば、工場をアトリエやギャラリーに改装した空間が好まれるのは、それが特性のない空間だからではない。工場の空間はむしろ逆に、きわめて明確な特性を持っている。工場には、様々な機械の自由な設置を可能にするために、できる限り無柱の大きな容積を持った空間が求められる。そこでの作業を考え、部屋の隅々まで光が均等に行き渡るように、天井にはそのためにもっとも適切な採光窓がとられる。その目標から逸脱する部位での建設コストは切り詰められる。工場はこうした論理を徹底することでつくられてきた。この結果として、工場は工場ならではの空間の質を持つに至る。工場は、無限定の空間と均一な光で満たされるということと引き替えに、一般的な意味での居心地の良さを捨てるという、明確な特性を持った空間なのである。工場は、単に、空間と光の均質を実現した抽象的な空間なのではない。工場は、そこでの作業を妨害しない範囲で、柱や梁の^(注8)トラスが露出されている、きわめて物質的で具体的な空間なのである。

このような空間に「自由」を感じるのは、そこではその空間の「使用規則」やそこでの「行動基準」がキャンセルされているからだ。「使用規則」をキャンセルされた物質の^(イ)カタマリが別の行為への手がかりとして再生するからだ。原っぱもおなじだ。そこは雑草の生えたでこぼこのある^(ウ)サラチであり、来るべき自由な行為のために整地されキューブとしてデザインされた空間なのではない。そこにはいろんな手がかりがある。

木造家を再利用したグループホームは、逆に空間の「使用規則」やそこでの「行動基準」がキャンセルされていない。その意味では「自由」は限定されているようにみえるが、そこで開始されようとしているのは別の「暮らし」である。からだと物や空間との

たがいに浸透しあう関係のなかで、別のひととの別の暮らしへと空間自体が編みなおされようとしている。その手がかりの(エ) ジューマンする空間だ。青木はいう。「文化というのは、すでにそこにあるモノと人の関係が、それをとりあえずは結びつけていた機能以上に成熟し、今度はその関係から新たな機能を探る段階のことではないか」と。そのかぎりでは C 高齢者たちが住みつこうとしているこの空間には「文化」がある。

住宅は「暮らし」の空間である。「暮らし」の空間が他の目的を明確にもった空間と異なるのは、そこでは複数の異なる行為がいれば同時並行でおこなわれることにある。何かを見つめながらまったく別の物思いにふけっている。食事をしながら、おしゃべりに興ずる。食器を洗いながら、子どもたちと打ち合わせをする。電話で話しながら、部屋を片づける。ラジオを聴きながら、カケイ(オ) ボをつける……。食事、労働、休息、調理、育児、しつけ、介護、習い事、寄りあいと、暮らしのいろいろな象面(注9)がたがいに被(かぶ)さりあっている。これが住宅という空間を濃くしている。(犬なら、餌(えさ)を食いながら人の顔を眺めるといったことができない？ 排尿しながら、他の犬の様子をうかがうということができない？)

住宅は、いつのまにか目的によって仕切られてしまった。リビングルーム、ベッドルーム、仕事部屋、子ども部屋、ダイニングルーム、キッチン、バスルーム、ベランダ……。生活空間が、さまざまな施設やゾーニング(注10)によって都市空間が切り分けられるのとおなじように、用途別に切り分けられるようになった。当然、ふるまいも切り分けられる。襖を腰を下ろして開けるといふふうに、ふるまいを鎮め、それにたしかかな形をあたえるのが住宅であつたように、歩きながら食べ、ついでにコンピュータのチェックをするといふふうに、(注意されながらも)その形をはみだすほどに多型的に動き回らせるのも住宅である。D 行為と行為をつなぐこの空間の密度を下けているのが、現在の住宅である。かつての木造家屋には、いろんなことがそこできるといふ、空間のその可塑性によって、からだを眠らせないという知恵が、ひそやかに挿し込まれていた。木造家屋を再利用したグループホームは、たぶん、そういう知恵をひきつこうとしている。

(鷺田清一「身ぶりの消失」による)

(注)

- 1 グループホーム——高齢者などが自立して地域社会で生活するための共同住居。
- 2 デイ・サーヴィス——高齢者などのため、入浴、食事、日常動作訓練などを日帰りで行う福祉サービス。
- 3 いざりながら——座った状態で体の位置をずらしながら。
- 4 「何言っておすな」・「お座りやす」——それぞれ「何をおっしゃっているんですか」・「お座りなさいませ」の意。
- 5 「痴呆」——認知症への理解が深まる前に使われていた言葉。
- 6 青木淳——建築家（一九五六～）。
- 7 ホワイトキューブ——美術作品の展示などに使う、白い壁面で囲まれた空間。
- 8 トラス——三角形を組み合わせた構造。
- 9 象面——ここでは暮らしのなかの場面的こと。
- 10 ゾーニング——建築などの設計において、用途などの性質によって空間を区分・区画すること。

問 1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

1 キヨソ

- ① 教科書にジュンキヨする
キヨシユウを明らかにする
③ トツキヨを申請する
キヨジツが入り混じる
④ ボウキヨに出る
⑤

(ウ)

3 サラチ

- ① セイコウドクの生活
大臣をコウテツする
② コウキユウテキな対策
技術者をコウグウする
③ キョウコウに主張する
④
⑤

(イ)

2 カタマリ

- ① 疑問がヒョウカイする
キカイな現象
② カイモク見当がつかない
ダンカイの世代
③ カイコ趣味にひたる
④
⑤

(エ)

4 ジュウマン

- ① ジュウコウを向ける
ジュウナンに対応する
② 他人にツイジュウする
施設をカクジュウする
③ ジュウオウに活躍する
④
⑤

(オ)

5 カケイボ

- ① ゲンボと照合する
世界的なキボ
② 亡母をシボする
懸賞にオウボする
③ ボヒメイを読む
④
⑤

問2

傍線部A「からだ^が家のなか^にある^{という}のは^{そういうことだ}」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

6

- ① 身体との関係が安定した空間では人間の身体が孤立することはないが、他のひとびとと暮らすなかで自然と身に付いた習慣によって、身体が侵蝕されているということ。
- ② 暮らしの空間でさまざまな記憶を蓄積してきた身体は、不自然な姿勢をたちまち正してしまうように、人間の身体はそれぞれの空間で経験してきた規律に完全に支配されているということ。
- ③ 生活空間のなかで身に付いた感覚によって身体が規定されてしまうのではなく、経験してきた動作の記憶を忘れ去ることで、人間の身体は新しい空間に適応し続けているということ。
- ④ バリアフリーに作られた空間では身体が空間から疎外されてしまうが、具体的な生活経験を伴う空間では、人間の身体は空間と調和していくことができるのでふるまいを自発的に選択できているということ。
- ⑤ ただ物理的に空間の内部に身体が存在するのではなく、人間の身体が空間やその空間にいるひとびとと互に関係しながら、みずからの身体の記憶に促されることでふるまいを決定しているということ。

問3

傍線部B「空間がそこで行われるだろうことに対して先回りしてしまっ**て**はいけない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 7。

- ① 原っぱのように、遊びの手がかりがきわめて少ない空間では、行為の内容や方法が限定されやすく空間の用途が特化される傾向を持つてしまうから。
- ② 原っぱのように、使用規則や行動基準が規定されていない空間では、多様で自由な行為が保証されているためにかえってその空間の利用法を見失わせてしまうから。
- ③ 遊園地のように、明確に定められた規則に従うことが自明とされた空間では、行為が事前に制限されるので空間を共有するひとびとの主体性が損なわれてしまうから。
- ④ 遊園地のように、その場所で行われる行為を想定して設計された空間では、行為相互の偶発的な関係から空間の予想外の使い方が生み出されにくくなるから。
- ⑤ 遊園地のように、特定の遊び方に合わせて計画的にデザインされた空間では、空間の用途や行為の手順が誰にでも容易に推測できて興味をそいでしまうから。

問 4

傍線部C「高齢者たちが住みつこうとしているこの空間には『文化』がある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8

- ① 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、人のふるまいが制約されているということとひきかえに、伝統的な暮らしを取り戻す可能性があるということ。
- ② 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、多くの入居者の便宜をはかるために設備が整えられているので、暮らすための手がかりが豊富にあり、快適な生活が約束されているということ。
- ③ 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、そこで暮らす者にとって、身に付いたふるまいを残しつつ、他者との出会いに触発されて新たな暮らしを築くことができるということ。
- ④ 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、空間としての自由度がきわめて高く、ひとびとがそれぞれ身に付けてきた暮らしの知恵を生かすように暮らすことができること。
- ⑤ 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、さまざまな生活歴を持ったひとびとの行動基準の多様性に対応が可能のため、個々の趣味に合った生活を送ることができるということ。

問5

傍線部D「行為と行為をつなぐこの空間の密度を下けているのが、現在の住宅である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9

- ① 現在の住宅では、仕事部屋や子ども部屋など目的ごとに空間が切り分けられており、それぞれの用途とはかわらない複数の異なる行為を同時に行ったり、他者との関係を作り出したりするような可能性が低下してしまっていること。
- ② 現在の住宅では、ゾーニングが普及することでそれぞれの空間の独立性が高められており、家族であってもそれぞれが自室で過ごす時間が増えることで、人と人とが触れあい、関係を深めていくことが少なくなってしまうこと。
- ③ 現在の住宅では、空間の慣習的な使用規則に縛られない設計がなされており、居住者たちがそのときその場で思いついたことを実現できるように、各自がそれぞれの行為を同時に行えるようになってきていること。
- ④ 木造家屋などかつての居住空間では、居間や台所など空間ごとの特性が際立っていたが、現代の住宅では、居住者が部屋の用途を交換でき、空間それぞれの特性がなくなってきたこと。
- ⑤ 木造家屋などかつての居住空間では、人体の運動と連動して空間が作り変えられるような特性があったが、空間ごとの役割を明確にした現在の住宅では、予想外の行為によって空間の用途を多様にすることが困難になっていること。

問 6

この文章の表現について、次の(i)・(ii)の各問いに答えよ。

- (i) 波線部Xの表現効果を説明するものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① 議論を中断し問題点を整理して、新たな仮説を立てようとしていることを読者に気づかせる効果がある。
- ② これまでの論を修正する契機を与えて、新たに論を展開しようとしていることを読者に気づかせる効果がある。
- ③ 行き詰まった議論を開くために話題を転換して、新たな局面に読者を誘導する効果がある。
- ④ あえて疑問を装うことで立ち止まり、さらに内容を深める新たな展開に読者を誘導する効果がある。

- (ii) 筆者は論を進める上で青木淳の建築論をどのように用いているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 筆者は青木の建築論に異を唱えながら、一見すると関連のなさそうな複数の空間を結びつけ、「暮らし」の空間として木造家屋を再利用したグループホームに関する主張を展開している。
- ② 筆者は青木の建築論の背景にある考え方を例に用いて、それぞれの作業ごとに切り分けられた現代の「暮らし」の空間を批判し、木造家屋を再利用したグループホームの有用性を説く主張を補強している。
- ③ 筆者は青木の建築論を援用しながら、空間の編みなおしという知見を提示することで、「暮らし」の空間として木造家屋を再利用したグループホームに価値を見いだす主張に説得力を与えている。
- ④ 筆者は青木の建築論を批判的に検証したうえで、現代の「暮らし」の空間と工場における空間とを比較し、木造家屋を再利用したグループホームに自由な空間の良さがあると主張している。